Color Science Association of Japan

産業景観と風土色　—愛知県常滑市の事例—

Industrial Landscape and Cultural Climate Color A Case of Tokoname, Aichi Prefecture

市田　圭　　ICHIDA Kei　　桜花学園高等学校　　Ohka Gakuen High School

Keywords: 産業景観，風土色，黒壁建築物，常滑

1. 問題の所在と従来研究

景観法施行を契機に，地域性のある景観保全の一環として風土色への関心が高まっている．風土色とは，地域の歴史文化と関連して保全された建造環境や自然環境にみられる色彩である(尾崎・佐久間 2006)．騒色を契機に建築物色彩に関する研究が進み，色彩計画の理論，建築物色彩の定量的分析，色彩の印象評価に関する研究が行われた．近年では，風土色を利用した環境色彩計画に関する研究が行われている．

これらを踏まえ，市田(2010)は地理学の風土論や景観研究を参考に，風土色の概念を多角的に理解する必要性を示し，分析課題として色彩景観の形成過程，人々の色彩認識を指摘した．風土色に基づく景観整備が進む中，その色彩を地域文化との関係から理解し，風土色を新たな枠組みで再考することが，色彩景観の地域性をより明確に理解する一助になると考えられる．

2. 研究の目的と方法

研究の目的は，風土色を，その地域の歴史や人々の色彩認識との関係から理解することである．研究対象は，窯業を主要産業に発展した愛知県常滑市の産業景観である．そして，そこにみられる黒壁建築物の「黒」，あるいは，陶器生産により大量に排出された黒煙や煤の「黒」を風土色としてとらえた．

目的に向けて，以下の 2 点を調査・分析した．1 点目は，地域の景観を，1970 年代以前(第 1 期)，1970 年代～1990 年代後半(第 2 期)，1990 年代後半以降(第 3 期)に区分し，その変化を明らかにした．2 点目は，地域住民へのインタビューにより，黒壁建築物や，その形成要因の 1 つである窯業により生じた煤や黒煙の「黒」をめぐる人々の色彩認識を分析した．

3. 窯業の発展と景観の変化

現在の常滑の景観は，明治時代，土管など大型陶器の大量生産を背景に形成され，土地整備に利用された陶器や黒壁の家屋が特徴的である．黒壁建築物には防腐のためにコールタールが塗装され，大量生産期には，黒煙・煤による汚れを防ぐ目的からも塗装された．

本研究では，黒壁建築物を形成・修景年代から区分し，第 2 期の観光地化，および第 3 期に再生された事例に注目した(図 1)．これらは景観保全を目的に再生されたもので，とりわけ第 3 期の事例には多様な黒色材料が利用される．これは，黒壁が地域に特徴的な景観要素と認識され，行政や地域住民，事業主など様々な主体により再生が図られた結果である．

このように，かつては家屋の維持を目的に形成された黒壁は，本来の機能性を離れ，その色彩が受け継がれ再生されている．黒壁建築物の保全と再生が進む中，「黒」が地域に特徴的な色彩として景観まちづくりに活用されていることが示された．

4. 黒をめぐる語り

現在，地域景観の象徴色と認識される「黒」をより幅広い視点から理解するために，第 1 期に地域で生活した人々にインタビュー調査を行い，当時の景観と人々の生産活動や生活経験との関係性をより詳しく検討する．

表 1 に示す地域住民の語りから，第 1 期の生産活動に関して，①黒煙や煤の影響を受けて生活し生産に従事したこと，②生産と生活の記憶が，黒色に関わる身体的経験とともに語られることが分かる．また，住民の色彩認識として，③身体的経験が黒色と結びつきが強い常滑独自の生産と生活の経験の中で形成されたこと，④地域景観と身体的経験に関連して語られる黒色が地域の象徴色として認識されていることが明らかになった．

批判的に認識されやすい黒煙に対し，調査対象の住民が肯定的な認識を持つ点は，常滑に特徴的である．これは，第1期の生産を担う住民が，幼少期から労働者としての生産活動に至るまで，自らの体を黒く染め，黒煙と煤を肌で感じ，黒色をめぐる身体的経験を重ねてきたことに起因する．こうした人々と景観要素との関係性は，身体的記憶(ハイデン 2002)の概念により解釈できる．この概念は，人々と場所との結びつきを形成する要因，もしくは関係性である．常滑では，黒色をめぐる経験に由来する身体的記憶が，人々と場所との結びつき形成する要因として作用していると考えられる．

住民が語る黒色は，黒壁建築物，黒煙と煤で汚れたすずめや洗濯物，樹木，家屋など多岐にわたる．そして，コールタールを塗装する経験，煤にまみれた作業の経

NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

験が，地域で暮らし，生産に従事した人々により誇りをもって語られる．大量の黒煙は大量生産の証であり，産業による経済的発展の象徴であった．「子どもの頃は，みんな黒い樹木の絵を描いていた」と語られるように，常滑ならではの身体的経験に基づく色彩認識こそが，常滑の風土色のアイデンティティである考えられる．

5．結論

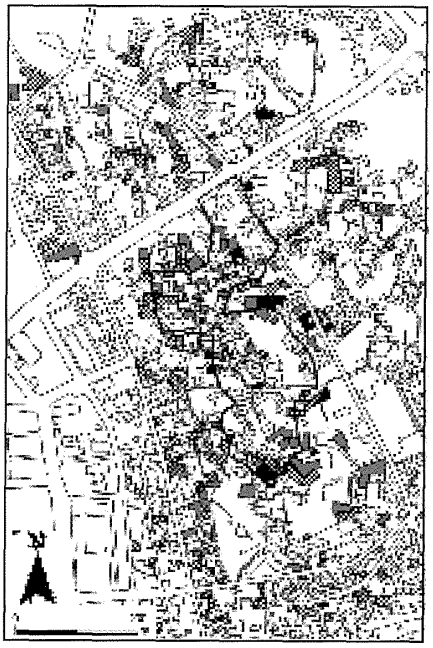
以上より，常滑を事例に，人々の黒色をめぐる身体的経験，そして黒色をめぐる認識の一端が明らかになった．常滑の黒色は，現在の地域の景観構成要素であると同時に，一部の住民の過去の経験に根ざした色彩であり，産業や生活の記憶が息づいた色彩である．保全される黒壁建築物を端緒に黒色を分析することで，黒色と地域住民との間の不可視的な関係性の一端が示された．こうした見方から風土色を再考することで，その概念は多様性を帯びる．そして，この見方が，風土色をめぐる新たな研究への手がかりになると筆者は考える．

参考文献

1) 市田圭 2010．都市の風土色に関する研究―ドイツにおける色彩景観の定量的分析をもとに―．日本色彩学会誌 34-2：108-119

2) 尾崎真理，佐久間彰三 2006．『風土色による色彩学の奨め―建築・まち・美しい景観の創造―』彰国社．

3) ハイデン，D．著，後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎訳 2002．『場所の力―パブリック・ヒストリーとしての都市景観』学芸出版社．



途	戸数	A.	B.	C.
製陶工場	68	43	23	2
陶器を扱う店舗	43	12	14	17
民家	143	110	33	—
倉庫等	20	20	—	—
総戸数	274	185	70	19

A＝黒壁が整備されていない建築物
B＝第 2 期に修景され黒壁が整備されている建築物
C＝第 3 期に黒壁が再生された建築物
―― 観光ルート（やきもの散歩道）

第 3 期に黒壁が再生された建築物

図 1．形成および修景年代から分類した黒壁建築物の分布とその用途

名前	年齢	性別	職業	生産活動や地域での生活の経験に関する語り
A 氏	85 歳	M	陶芸家	①「昔は黒い建物がたくさんあった」④「黒はこの場所の特徴だ」①「窓枠や部屋の中に煤がたまって真黒だった」
				①「洗濯物が真黒になったから…」③「新しい建物でもコールタールで真黒に塗った」
B 氏	63 歳	M	陶芸家	④「常滑の雀は黒いって，よく言われるけど……」①「昔はどこでも黒い建物が多かったからね」
C 氏	60 歳	F	主婦	①「畳が真黒になったもの．昔は雨戸なんてなくて，戸を開けておいたら家の中まで真黒になった」
				①「天気がよくて風の少ない日は，黒煙が上に上がらずに地面を這う……歩くたびに煤があがった」
				③「大きな椿の木があって，昔はよく登って遊んだ．その頃は黒煙で木も椿の花も真黒だった」
D 氏	91 歳	F	無職	①「真黒な煙がものすごくたくさん上がっていた」
E 氏	92 歳	M	貿易業	①「常滑の空はいつも真黒だった」④「常滑のすずめは黒いという」
F 氏	64 歳	M	無職	①「洗濯物をたたくと黒煙が舞い上がった……」③「子どもの頃はみんな黒い樹木の絵を描いていた」
G 氏	50 歳	F	喫茶店	「できたての土管をみんな欲しがって女性も窯に入って取り合った」
H 氏	50 歳	F	無職	②「黒い壁は印象にある……昔よく壁の出っ張りで遊んだもの」①「畳の隅に煤がたまる」
				②「（生産活動で）みんな，ほっぺたに“しゅっしゅっ”と黒い線が入っていた」①「蚊帳で黒煙を防いでいた」
I 氏	91 歳	F	無職	③「あの鳥はなんだろう．あれは雀だ．違う，黒いもの．常滑だもの雀だって黒いさ．という話をして」
				④「黒い町常滑も次第に白い建物にかわりつつあるが……」③「煙と粘土と黒い石炭の山が…」
J 氏	82 歳	F	無職	②「石炭山で遊んだ…靴から何からまっくろけに…」②「昔はみんな素足で働いてたの．だから体中真黒になって」

表 1．地域住民の語り

NII-Electronic Library Service